

共同研究「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」の経過と概要

山田慎也

1 研究の目的

本報告書は、平成二三（二〇一一）年度より平成二五（二〇一三）年度まで国立歴史民俗博物館において行われた基盤共同研究「民俗儀礼の変容に関する資料論的研究」（研究代表者：山田慎也）の成果報告論集である。

通過儀礼や年中行事など、地域で伝承されてきた諸儀礼や習俗等の民俗は、近代化の過程で大きく変容している。なかでも、現在実践されている儀礼は、さまざまな要因によって地域のコンテキストからはずれ、均質化する傾向が多くみられる。例えば、七五三は、地域によりさまざまに年齢別、男女別などの組み合わせによって従来行われてきたが、現在、女子の三、七歳、男子の三、五歳とされ、従来慣習のない地域でも行われるようになってきている。これは商業化による宣伝と作法書の普及で全国に浸透したことによる。また墓制は、一八八四（明治一七）年の墓地及埋葬取締規則（のちの墓地、埋葬等に関する法律に引き継がれる）により、多様な墓の習俗の有り様も次第に平準化しつつある。

こうした民俗儀礼を取り巻く環境については、法令の施行や行政の働きかけ、風俗改良運動や生活改善運動などの影響などを含む政治的要因、

医療施設による出産や終末期、死亡確認など、生物医療の進展による医療的要因、またデパートや葬祭業などの儀礼産業の利用など消費文化の浸透による経済的要因、地域の過疎化、少子高齢化などによる社会変動による社会的要因などが考えられ、これは基本的に日本という国民国家の枠組みの中での変容と均質化であり、一種の「国民儀礼」ということができよう。

しかしこうした点について、産育や年中行事などの一部で個別的には指摘されているが、それを総合的に捉えようとする研究はあまりなされてこなかった。むしろ民俗学では、地域が独自に実践している儀礼をおもに取り上げてきた。だが地域の儀礼が成立するのも、情報が容易に流通する現代において、全国的な平準化とのせめぎ合いの中で生じているものであり、全国的動向の理解は地域性を持つ儀礼を理解する上でも重要である。

博物館は様々な資料を収集しているが、地域博物館では、地域性を帯びた儀礼については積極的に調査を行い資料収集する一方、平準化していくものについてはあまり体系的に取り上げることではなく、とくにモノ資料も体系的にまた積極的に収集されていない。

そこで本研究では、第一に通過儀礼、年中行事を中心に現代の民俗儀

礼の様相と変容の要因について、政治的、医療的、経済的、社会的な観点など多様な視点から総合的に分析検討し、地域から乖離し国民儀礼化した民俗の傾向を検証する。第二にそれにとまなう関連する資料、なかでもモノ資料の収集の方向性を確立する。以上の研究を行うことで現代の民俗儀礼の動態を明らかにすることを目的とする。

2 研究組織(所属や役職は二〇一三年度当時)

共同研究員(館外)

- 板橋春夫 國學院大學・講師
岩本通弥 東京大学大学院総合文化研究科・教授
浮ヶ谷幸代 相模女子大学人間社会学部・教授
大本敬久 愛媛県立歴史文化博物館・専門学芸員
小山隆秀 青森県教育庁文化財保護課・主査
加藤紫識 千代田区日比谷図書文化館・文化財調査指導員
門田岳久 立教大学観光学部・助教
小井川理 神奈川県立歴史博物館・学芸員
小国喜弘 東京大学大学院教育学研究科・准教授
鈴木由利子 宮城学院女子大学・講師
立石尚之 古河歴史博物館・学芸員
土居浩 ものづくり大学技能工芸学部・准教授
俵本悟 成城大学文芸学部・准教授
前田俊一郎 文化庁伝統文化課・文化財調査官
松田香代子 愛知大学・講師
八木透 佛教大学歴史学部・教授
(館内)
青木隆浩 本館研究部・准教授
○小池淳一 本館研究部・教授

重信幸彦 本館研究部・客員教授

常光徹 本館研究部・教授

原山浩介 本館研究部・准教授

松尾恒一 本館研究部・教授

◎山田慎也 本館研究部・准教授

(◎は研究代表者、○は研究副代表者)

リサーチ・アシスタント

坪内俊行 慶應義塾大学大学院社会学研究科・博士課程

田中孝枝 東京大学大学院総合文化研究科・博士課程

ゲストスピーカー

間芝志保 筑波大学大学院人文社会科学研究科・博士前期課程

稲井稔 NPO法人阿波勝浦井戸端塾・理事長

国清一治 ビッグひな祭り初代実行委員長、勝浦町議会・副議長

石井研士 國學院大學神道学部・教授

小山静子 京都大学大学院人間・環境学研究科・教授

玉川貴子 名古屋学院大学現代社会学部・准教授

日高昇 前愛知県議会議員

戸田宗明 元東浦町助役

滝口正哉 東京都公文書館

下田雄次 弘前大学大学院地域社会研究科・後期博士課程

郷堀ヨゼフ 崇徳大学設立準備委員会事務局・教員

相澤出 医療法人社団爽秋会・東北死生学研究所・研究員

3 研究の経過

研究会は三年間で一一回開催した。その際にワールドワークを行い

つつ現地での共同研究会を毎年行った。さらに各自個別のフィールドワークも行った。

平成二三年度

○第一回研究会 平成二三年六月二十五日(土)・二十六日(日) 国立歴史民俗博物館

山田慎也

「共同研究の趣旨説明」

「民俗儀礼の変容と資料論の構築」

前田俊一郎

「近代の法制と地域社会―墓制の変容・再編を考える―」

各メンバーの「自己紹介および研究紹介」

今後の計画についての議論

○第二回研究会 平成二三年一〇月二十九日(土) 早稲田大学

第七八回歴博フォーラム「近代化のなかの誕生と死」を開催し、共同

研究メンバーが報告し、他のメンバーも討議に参加した。

板橋春夫

「いのちの近代…トリアゲバアサンから助産師へ」

鈴木由利子

「子どもの誕生にみる『選択される命』」

山田慎也

「葬儀の変化と死のイメージ」

前田俊一郎

「近代国家と墓制…死者の「共葬」をめぐる実践」

浮ヶ谷幸代 誕生に関するコメント

土居浩 葬送に関するコメント

○第三回研究会 平成二三年一二月一七日(土)・一八日(日) 国立歴史民俗博物館

小井川理

「出産・成長にかかわる「白絵」の資料について」

問芝志保(ゲストスピーカー)

「墓産業の展開から見る墓の変化―「画一化」と「多様化」―」

大本敬久

「巳正月(仏の正月)の現代的変容」

○第四回研究会 平成二四年二月一七日(金) 二〇日(月) 徳島県

勝浦町・徳島市

稲井稔・国清一治(ゲストスピーカー)

「ビッグひな祭りと地域活性化」

松田香代子

「ツルシの民俗から「雛のつるし飾り」―民俗行事を発信する伊豆

稲取温泉の取り組み―」

研究会と併せて、徳島県勝浦町ビッグひな祭り、徳島市の徳島城博物

館などで、雛祭りのイベント化に関するフィールドワークを行った。

平成二四年度

○第五回研究会 平成二四年六月二六日(土) 国立歴史民俗博物館

八木透

「民俗学における婚姻研究の回顧と展望―柳田國男から石井研士ま

で―」

石井研士(ゲストスピーカー)

「神前結婚式の創出と変容」

○第六回研究会 平成二四年一月二〇日(土) 国立歴史民俗博物館

小山静子(ゲストスピーカー)

「生活改善運動からみた日常生活の近代化」

玉川貴子(ゲストスピーカー)

「ライフエンディング・ステージの創出と葬儀における消費と経済

産業省の『ライフエンディング調査』から」

○第七回研究会およびフィールドワーク 平成二五年二月九日(土)

一日(月) 愛知県東浦町郷土資料館(うのはな館)

日高昇(ゲストスピーカー)・戸田宗明(ゲストスピーカー)

「緒川の厄歳行事」

研究会と併せて、愛知県東浦町緒川地区の厄歳行事について、中心的役割をはたす四二歳の年齢集団である緒川子丑会の活動を中心に、入海神社の厄歳行事等のフィールドワークを行った。

平成二五年度

○第八回研究会 平成二五年六月二二日(土) 国立歴史民俗博物館

山田慎也

「第四展示室」における人生儀礼の展示について」民俗展示の見学

加藤紫識・滝口正哉(ゲストスピーカー)

「都市における人生儀礼に関する資料論」

○第九回研究会およびフィールドワーク 平成二五年九月四日(水)

六日(土) 青森県弘前市・五所川原市

小山隆秀

「近代における岩木山信仰と習俗の変容」

下田雄次(ゲストスピーカー)

「岩木山のお山参詣」

俵木悟

「民俗資料としての「審美の基準」へのアプローチ―鹿児島いちき串木野市、大里七夕踊りの事例から」

研究会と併せて、津軽地方のお山参詣について、弘前市の岩木山および岩木山神社、また岩木山のうつつしである五所川原市の市浦脇本地区の脇本岩木山の参詣行事のフィールドワークを行った。

○第一〇回研究会 平成二五年二月二二日(土) 〓二三日(日) 国立歴史民俗博物館

「近代火葬論序説―映画『死体焼却人』を手がかりに」

郷堀ヨゼフ(ゲストスピーカー)

「近代火葬文化論序説その1―チェコの視点から」

土居浩

「近代火葬文化論序説その2―日本の視点から」

重信幸彦

「復活という創生―福岡市早良区脇山における「おひまち」から」

○第一一回研究会 平成二六年二月一六日(日) 国立歴史民俗博物館

浮ヶ谷幸代

「近代化としての「医療化」」

「精神医療における病院医療から地域医療へ」

相澤出(ゲストスピーカー)

「地域」のなかの看取り―宮城県における在宅緩和ケアの現場から」

門田岳久

「消費される聖地―沖縄・斎場御嶽における観光／宗教の重層的コンフリクト」

立石尚之

「オリコミと民俗―博物館資料としての折り込み広告と拡散される民族的解説」

4 研究の成果

さまざまな地域で伝承されてきた民俗儀礼が、近代化の過程において変容した時には均質化して国民儀礼となっていく様相を、おもに政治的、医療的、社会的、経済的観点から総合的に検討を行っていった。

法令や行政など政治的観点からでは、青木隆浩「近代日本の禁酒運動と禁酒法案からみた儀礼の中の酒」において、禁酒運動とその法制化を巡り、儀礼に用いる酒をとりあげつつ、法令とのせめぎ合いによる、飲酒という生活慣習の形成と飲酒への認識を明らかにした。また土居浩「都市で死者はいかに扱われるべきか―井下清による都市の葬務体系構想をめぐって」では、戦後普及する公園墓地の基本構造を構築した東京市公園課長井下清の葬務構想を検討し、公衆衛生を基盤とした現在の葬墓制の背景を分析した。

生活と医療との関わりなど医療的観点からの民俗の変容について検討したものととして、浮ヶ谷幸代「日本の精神医療における「病院収容化（施設化）」と「地域で暮らすこと（脱施設化）」―北海道浦河赤十字病院精神科病棟の減床化と廃止の取り組みを中心に」では、精神病患者の病院収容と脱施設化の取り組みを通して、生活空間の中に主体的に医療を組み込む医療の生活化という新たな視点を提示している。また板橋春夫「産屋習俗の終焉過程に関する民俗学的研究」では、産屋習俗が出産の医療化によりほぼ消滅したことについて、個々の記憶をもとに医療化による

出産の変容の析出に成功している。一方で水子供養という出産とは真逆の観点から、医療化と胎児観の変化を指摘したのが、鈴木由利子「水子供養にみる胎児観の変遷」であり、医療化の進展に伴って水子供養がむしろ生成されていったことを指摘する。

社会変容と民俗との関係について検討したのが、小山隆秀「「伝統」の希求と創出―青森県津軽地方のねぶた喧嘩習俗を事例として」であり、祭礼のコンフリクトを通して形成された慣習が伝統として認識されていたことを通して、社会形成と民俗との関係を明らかにした。八木透「民俗学における婚姻研究の回顧と展望―柳田国男から石井研士まで」では、婚姻研究の変遷を社会形態との関わりを検討から、今後儀礼研究やライフヒストリー研究などあらたな展開の可能性を指摘している。

民俗変容と経済との関係では、門田岳久「聖地と儀礼の「消費」―沖縄・斎場御嶽をめぐる宗教／ツーリズムの現代民俗学的研究」では、聖地の観光化と「聖性」の商品化を通して高度消費社会における民俗の動態を捉えている。さらに立石尚之「折り込み広告と民俗」では、長期にわたる折り込み広告を分析し、民俗的な解説が販売促進の周期に組み込まれ、儀礼が全国均質化していくことを指摘している。

以上のように具体的検討をする中で、それぞれの要因が複合的に絡み合っており、単に要因を認知するだけでなく、変容の過程を幅広い背景から読み解き、関連する要因を考察する必要があることを改めて認識した。

さてこのような多様な相関のなかで民俗儀礼を検討していく必要があることを認識したが、その様相を資料としてどのように見いだしていくかがさらなる目的であった。

まず有形民俗の資料として、山田慎也「告別式の平準化と作法書」では、近代から現代の作法書をもとに、告別式の浸透と葬儀の平準化を指摘し、作法書が正しいとされる方向性を作り出すものであることを示し

た。加藤紫識「博物館資料にみる都市の人生儀礼」では、人生儀礼の変遷を、着物などの物質文化や写真、聞き取り資料など多面的な資料によって照射し、資料の持つ多相性を提示している。松田香代子「ひな祭り」のモノ資料からみる近代化―駿河雛具の御殿飾りを中心に―では、ひな祭りに用いられた「御殿飾り」の様態と流通を取り上げ、民俗資料の流通消費の状況を分析している。

また無形民俗の資料化として、俵木悟「民俗資料としての「審美の基準」へのアプローチ―鹿児島県いちき串木野市、大里七夕踊りの事例から―」では、審美の基準が民俗資料として重要な位置を占めていることを、民俗芸能の具体的な姿から指摘し、民俗の生成に大きな役割を果たしていることを明らかにした。また小池淳一「民俗儀礼の文芸資源化―七五三と岡見―」では、民俗儀礼を起源とする俳句の季語を分析し、文芸の素材ともなっている民俗儀礼の広がりを指摘している。また松尾恒一「戦後の在日華僑文化の一考察―伝統の観光利用と国際関係における変容―」では、日本における華僑の宗教文化の変容を、また常光徹「二〇一五年のエンコウ祭り」では、南国市のエンコウ祭りの変容を報告している。

このように、民俗儀礼の変容を、多様な側面から捉え、有形、無形の資料として、多面的に集積していくことで、民俗学の基礎を固めていく必要があることを認識した次第である。

なお、本研究の成果は、二〇一三（平成二五）年三月一九日、第四室民俗展示「列島の民俗文化」のリニューアルオープンにおいて、随所に共同研究の成果が反映されることとなった。たとえば、「おそれと祈り」のコーナーでは、永島婚礼会の移動式神前結婚式祭壇が展示されており、これは第二次大戦後、ホテルや結婚式場などの場で神前の挙式、披露宴という儀礼形態の構築に大きな影響を与えたものとして取りあげられている。さらに、二〇一三年一月より第四室特集展示「さまざまな節供」も本研究の成果の一部であり、節供の民俗的多様性と商品化による儀礼

の均質化、また観光化について展示を行った。

また、二〇一一年一〇月二九日、早稲田大学において、第七八回歴史博フォーラム「近代化のなかの誕生と死」を開催し、共同研究メンバーが報告し、一般に公開して議論を行った。これは来聴者の関心も高く、研究成果が公開された意義は大きかった。このフォーラム記録として、山田慎也・国立歴史民俗博物館編『近代化のなかの誕生と死』（二〇一三、岩田書院）が刊行された。

さらに、関連の事業として、二〇一二年七月七日大正大学において、歴史国際シンポジウム「現代における死の文化の変容―東アジア地域の葬送墓制を中心に―」も開催され、近代化による葬送儀礼の変容が東アジアでも同時並行的に生じ、しかも相互に影響を与えていることが判明した。この成果として、山田慎也・鈴木岩弓・国立歴史民俗博物館編『変容する死の文化―現代東アジアの葬送と墓制』（二〇一四、東京大学出版会）が刊行されている。